

株式情報 (2026年3月31日現在)

当社は、投資家の皆さまがより投資しやすい環境を整えることを目的とし、2026年5月1日付で当社普通株式を1株につき3株の割合をもって分割いたしました。本ページには、当該株式分割前の株式数を基準とした数値を記載しています。

 詳しい情報はこちら
<https://www.sanki.co.jp/news/release/doc/article706.pdf>

事業年度	毎年4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	毎年6月下旬
単元株式数	100株
発行可能株式総数	192,945,000株
発行済株式総数	53,661,156株
株主数	16,236名
株主名簿管理人 および特別口座の 口座管理機関	三井住友信託銀行株式会社 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号
上場証券取引所	東京証券取引所
証券コード	1961

大株主

株主名	持株数(千株)	持株比率(%)
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	5,521	10.84
明治安田生命保険相互会社	5,040	9.90
三機共栄会	3,065	6.02
大樹生命保険株式会社	2,903	5.70
日本生命保険相互会社	2,152	4.23
株式会社日本カストディ銀行(信託口)	1,841	3.62
ステート ストリート バンク アンド トラスト カンパニー 505001	1,766	3.47
三機工業従業員持株会	1,479	2.91
HSBC－FUND SERVICES HSBC－006 MF EFM	850	1.67
ステート ストリート バンク アンド トラスト カンパニー 505025	770	1.51

(注) 当社は自己株式2,743千株を保有しておりますが、上記大株主からは除いております。
また、持株比率は自己株式を除いて計算しております。

第三者意見



一橋大学CFO教育研究センター長
伊藤 邦雄

全体的な印象を言うと、昨年の統合報告書と比べ、2026年版はいろいろな点で格段の進歩がみられたことです。まずは評価したいのは、「三機工業とはどんな会社なのか」、つまり同社のアイデンティティがかなり明確に映し出されていることです。この4月、社長に就任した名古屋社長のメッセージである「不変と進化」に込められているように、100年を迎えた今後に変えてはいけないものとして、顧客・協力会社との信頼関係、高い技術力、従業員の誠実さが明確に意識され、さらに総合エンジニアリングと専門技術の両立を進化させることを競争優位と位置づけています。まさに信頼×技術×人財×総合エンジニアリングという、三機工業らしい価値創造の源泉がわかりやすく説明されています。これは同社のマテリアリティとの一貫性もみられます。

「価値創造プロセス」の構造もかなり改善されています。2026版では、6つの資本 → 総合エンジニアリング力→事業→経営戦略→社会課題解決という構造が示されています。さらに財務・資本戦略、人財戦略を経営ビジョンと事業戦略に接続していることも評価できます。

特に、人的資本経営に対する取り組みが着実に進捗していることが読み取れます。例えば、人的資本に求められる資質として、コミュニケーション能力、創意工夫、やり抜く力を掲げ、求める人材像の解像度をあげています。そしてこれを支える活動としてグループ内対話の場(MCU)を通して、社長も拠点に出向き、社員との対話を積極的に展開している。まさに言行一致が見て取れます。

同社の財務戦略はバランスがとれており高く評価できます。ROEだけでなく、ROIC・成長性・事業戦略を統合して経営

資源配分を論じています。機械システム事業について収益構造改善、不動産について売却を含めた資本効率改善まで踏み込んでいます。さらにROE、成長投資枠、M&A、政策保有株式縮減、株主還元など、資本配分に具体性がみられます。言ってみれば、どの事業に資本を振り向け、どこから資本を引き上げるかというポートフォリオ経営の輪郭がわかりやすい。

一方で、課題もまだ残されています。「資本」はかなりよく説明されていますが、「資本がどう能力(Capability)に変わるのか」がまだ十分に説明されていないことです。2026版には6つの資本が並んでいます。そして人的資本、知的資本、社会・関係資本などについて非常に多くのデータが掲載されています。ただ投資家を含めて私たちが本当に知りたいのは、「だから三機工業は何ができる会社なのか」です。

たとえば、〈人的資本＋知的資本＋顧客関係＋協力会社ネットワーク〉→顧客課題を発見する→複数の専門技術を統合する→設計・施工・保守を横断して解決する→高品質・高採算案件を継続的に獲得するという「価値変換メカニズム」がより鮮明に見えてくれば、現在の6資本モデルが一気に価値創造モデルに昇華します。

それとの関係で「総合エンジニアリング力」についてもっと知りたいと思います。技術の種類が多いことなのか、顧客課題を理解する能力なのか、複数部門を統合する能力なのか、協力会社を束ねる能力なのか、プロジェクトマネジメント能力なのか。おそらく全部でしょう。今後、「総合エンジニアリング力を構成するCapability」の解像度が上がることを期待してやみません。

第三者意見をうけて

SANKI REPORT 2026の発行にあたり、貴重なご意見をいただき、心より感謝申し上げます。
「不変と進化」を軸とした当社のアイデンティティや価値創造プロセスの構造、人的資本経営の進捗、ROE・ROICを踏まえた財務・資本戦略のバランスについて評価いただいたことは、大変励みになるとともに、今後の取り組みへの後押しと受け止めております。
一方、ご指摘いただいた「資本がどのようにCapabilityへ変換されるのか」という価値変換メカニズム、ならびに「総合エンジニアリング力」を構成する能力要素の具体化については、当社としても重要な経営課題であると認識しております。
ご指摘いただいた視点も踏まえ、今後は技術力・顧客理解力・部門横断力・協力会社との連携力・プロジェクトマネジメント力といった要素に分解し、各資本がこれらの能力へどのように変換され、事業成果や企業価値の向上につながっているのかを、具体的な事例や指標を交えて示せるよう検討を進めてまいります。中期経営計画2027の実行プロセスの中で議論を深め、次回以降のSANKI REPORTにおいて、より解像度を高めた形でお示ししてまいります。
今後もいただいたご意見を踏まえ、価値創造ストーリーの明確性を高め、持続的な企業価値の向上に努めてまいります。

常務執行役員 コーポレート本部長 浜坂 順一